



Title	憶良の七夕歌 二題
Author(s)	山崎, 馨
Citation	語文. 1954, 11, p. 18-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

憶良の七夕歌 二題

山崎 馨

一、余夜毛——アマタヨモ——

牽牛者 織女等 天地之 別時由 伊奈宇之

呂 河向立 意空 不安久爾 嘆空 不安久

爾 青浪爾 望者多要奴 白雲爾 涕者尽奴

如是耳也 伊伎都栢乎良牟 如是耳也 恋

都追安良牟 佐丹塗之 小船毛賀茂 玉繩之

真可伊毛我母一云小棹 朝奈芸爾 伊可使渡

夕鹽爾一云夕 伊許芸渡 久方之 天河原爾

天飛也 領巾可多思吉 真玉手乃 玉手指更

余宿毛寐而師可聞一云伊毛左 秋爾安良受登母

待登毛——万葉集卷第八・一五二〇

この歌は山上臣憶良七夕十二首の中たゞ一首の長歌であり、二

首の反歌を伴ってゐる。

この歌に於ける問題は最終部の余宿毛寐而師可聞の訓を以て第

一とするので、こゝに、それについて私見を述べてみたい。まづ

諸訓を眺めると

○ヨイモネテシカモ……拾穗抄、童蒙抄、代匠記精撰本(能寝の意)。

○アマタイモネテシガモ……考、略解、全釈。

但し略解宣長説には、宿の字の上句脱たるにて餘は其中の一

字なるべし、と云ふ。

○余多イモネテシカモ……古義(岡部氏の考による)。

○アマタタビ、イモネテシガモ……總索引。

○アマタイモ、ネテシカモ……新訓、定本、總釈。

○余夜毛、イモネテシカモ……新考。(全註釈別説、年表)

○余イモネテシカモ……全註釈。

○余イモネテシガモ……私注。

このやうに紛々として帰するところを知らない。そこでわたくし

は解決の手がかりとして、憶良の長歌全般についてその最終部の

形式を調べてみた。すると、最終部が五音―七音―七音となつて

ゐる長歌が九首(七九四、八〇二、八〇四、八一三、八八六、八

九二、八九四、八九七、九〇四)五音―七音―八音となつてゐる

長歌が一首(八〇〇)であることがわかった。このことは彼の長

歌の最終部が最も完成された長歌形式に一致してゐることを示す

のである。憶良といふ人は、歌の形式について異常な関心を寄せ

てゐたやうである。五十嵐力博士が「国歌の胎生及発達」の中で

述べられたやうに、憶良は分解長歌に意を注ぎ、その最高傑作を残した。令反感情歌、貧窮問答歌、更に又一五三七、一五三八、七九九などの特異な歌体を見るとき、そこに我々は、他の万葉作家の誰かが示さなかった点、即ち歌の形式についての強い意識を窺ふことができるであらう。わたくしはこのやうな憶良の意識が長歌の末尾にも働いてゐた、長歌末尾の形式についても特別の配慮があったと考へるのである。さうとすれば、憶良の長歌に於いてこの一例のみが末尾三音―七音―八音、或いは五音―五音―八音のやうな不整型であつたとは不穩當であつて、こゝは余を五音に訓み、以下をイモネテシカモ―アキニアラズトモと七音―八音に訓むべきであらう。少くとも末尾の二句が七音―八音であつたといふことは、一云の「伊毛左禰而師加」が「宿毛寐而師可聞」の別伝であることを示してゐる点からも云ひ得ることであらう。そして又、神田本には「余宿毛寐而師可聞而師如」(如は加の誤りで、ヨイモネテ―シカモネテシカであらう)となつてゐる由であるから、最後の三句の中、後の二句が七音―八音であつたことは動かしがたいやうである。

そこで、余を五音に訓むためには、私注のやうに余が飽、饒に通ずる字であるとしてアクマデニと訓むか、或いは脱字説を立ててなんらかの字を補ふか、いづれかの道を取らなければならぬであらう。わたくしはこの長歌の書きぶりから考へて脱字説が勝ると思ふ。そしてその場合、古義の説よりも新考の説が勝り、これこそ最も適當な原形への推定であらうと思ふのである。即ち「余夜毛宿毛寐而師可聞」と續いてゐたものが、字形の近似から

その一方が脱落したと考へることは、充分の蓋然性を有してゐる。かくてわたくしは新考の訓のやうにアマタヨモ―イモネテシカモ―アキニアラズトモと訓んで、この長歌の末尾も亦彼の他の長歌の末尾と同じく整備された形式であつたことを認めたいのである。蓋し五音―五音―八音であつては、長歌の終結部に必要な盛上り、高潮を得ることが困難となるであらう。

なほ「余」字は集中で乙類の仮名ヨとして用ゐられ、このやうにアマタ或いはアクマデニと訓読される例を見ない。けれども、足りて且つ余るまでにアマタである意味に、古くから解かれてゐたのであらうか。(乞御參照―三五四五、三六七三、沈桐自哀文、三九六一左註。) また、伊奈字之呂はイナムシロに於ける子音mが脱落したものであつて、語義を離れた音声描写と考へられてゐる。

二、伊刀―甚

天漢伊刀河浪者多多禰母母伺候難之近此瀬乎

―万葉集卷第八・一五二四

本項に於いては、第二句の「伊刀」について私見を述べさせていたゞくことにする。これも憶良七夕歌十二首の中に一首である。さて、イト(甚)のトは仮名遣奥山路には甲類のトを用ゐるとしてあるが、實際に仮名書の場合を調べてみると、甲類三例の他に乙類の等が五例、登が一例認められるのである。

等―(1)七八六、(2)四二一九、(3)八九二、(4)八九七、

東歌三五四八。

登―(5)四〇九二。

甲類の三例とはこの一五二四と防人歌の四三七九、四三八一とであるが、乙類の六例を見れば、実情は仮名遣奥山路の記述に反してむしろ甲類三例を誤用とすべきやうに考へられてくるのである。ここに注目すべきは次の一例であらう。

五十段⁺寸⁺太⁺うすき肩根をいたづらに掻かしめつつも逢はぬ人か
——(6)二九〇三

この「段」は表音の訓假字であるが、段を意味するトノトは、次の諸例のやうにいづれも乙類の仮名を以て示されてゐる。

○橋の下照る庭に等能建てて酒宴^{酒宴}います我が^{わが}大君かも

——(7)四〇五九

○大皇はときはに在さむ橋の等能のたちばなひた照りにして

——(8)四〇六四

○左夫流児がいつきし等能に鈴掛けぬ早馬下れり里もとどろに

——(9)四一〇

○都武賀野に鈴が音きこゆ上志太の等能の仲子し鳥狩すらしも

——東歌・三四三八

○稲つけば轍る我が手を今宵もか等能の稚子が取りて嘆かむ

——東歌・三四五九

○父母が等能の後の百代草百代いでませ我が来たるまで

——防人歌・四三二六

○真木柱讀めて造れる等乃の如いませ母刀自面交りせす

——防人歌・四三四二

かくて二九〇三に於ける「五十段寸太」は、イト(甚)のトが本来乙類であったことを明らかに示して居り、このまゝでは甲類の

三例を誤用と認めざるを得ないやうである。

しかるに、橋本進吉博士は次のやちに述べられた。即ち「国語仮名遣研究史上の一発見——石塚龍麿の仮名遣奥山路について——」の第四項である。

実際あるよりも多く例外を出した結果、例外に慣れて遂に重大なる過失を犯すに至つたのは最悲しむべき事である。重大なる過失とは万葉集中の東国語を例証とした事である。自分の研究によれば、十三音の仮名遣が行はれて居たのは、我が国の中央部であつて、恐らくそれ以西の諸地方にも及んで居たであらうが、東国には及ばなかつたのである。万葉集卷十四の東歌、殊に卷廿なる防人歌に此の仮名遣の乱れたものが甚だ多いのは此の爲である。然るに此等の歌を採つて例証としたのは誠に大なる欠点であつて、東国語を除き去れば此の書に挙げた例外は著しく其の数を減ずるのである。

そこで、理路を明らかにするために、わたくしは右に掲げた例歌の中から東歌、防人歌を悉く除き去ることにした。すると、こゝに鮮明されたことは、イト(甚)のトが乙類であることを示す九例(1)↓(9)に対して、ひとり甲類を使用する一例が残ること、即ち一五二四の存在なのである。この歌は前述のやうに山上憶良の作であつて、特殊仮名遣が行はれてゐなければならぬ筈の歌である。こゝに於いて甲類の一例と乙類の九例とのいづれかが正用であり、いづれかが誤用であるとするならば、当然甲類の一例を誤用とせざるを得ず、一例を正用として九例の誤用を設けることは慎まなければならないのである。

しかるに、この現象は正誤を以て断すべきではなく、またト音
甲乙の混用はこれだけではなかった。武田祐吉博士は次のやうに
述べて居られる（万葉集校定の研究、一五三・一五四頁）。

念乍有者 生刀毛無（卷二、二二七）

吾情利乃 生戸蒙名寸（卷十一、二五二五）

右の例に使用されてゐる刀および戸は、いづれもトの甲類の音
に属し、トの乙類の音である助詞トとして解することが出来な
い。

これらのトは、体言として取り扱ふべく、依って、イケルト
モナシと読むべきもの

と考へられる。また

山徐往者 生跡毛無（卷二、二二二）

（この間四例省略……山崎記）

月之経去者 生友名師（卷十二、二九八〇）

これらの例に於ける跡および友のトは、トの乙類の音であつて、
前の二例とは音声を異にし、これは助詞トと見るべきであるか

ら、これらの句はイケルトモナシと読むべきである。然るに
夷爾之乎礼婆 伊家流等毛奈之（卷十九、四一七〇）

とある等は、トの乙類の音であるから、助詞トと見るべきであ
るにかかはらず、イケルトモナシと書いてゐるのは、トの甲類
の音が、乙類の音に移動したものと云へるであらう。

そして、後に聞き知ったところによれば、上古のト音については
既に大野晋氏の御説があり、天平の頃にはトの甲乙の区別が乱れ
て来て、歌には比較的古い発音が用ゐられてゐたが、他類の仮名
で記されたものも誤りではなく、それは当時の音声描写を示すと
いふことである。武田博士の示された例は甲類から乙類への移動
であり、この例は乙類から甲類への移動であつて、当時甲乙二類
のトに於いて相互に交通があつたことは認めなければならぬや
うである。

かくてわたくしの以上の論述は、単にめづらしい一例を指摘し
たことに止るのである。

昭和二十八年六月三十日稿了

——大阪府立北野高校教官——